

第 54 回大阪府学校教育審議会 概要

1 日時 令和 6 年 7 月 25 日（木）14 時 00 分から 16 時 00 分

2 場所 ホテルプリムローズ大阪 3 階 高砂（大阪府大阪市中央区大手前 3 丁目 1 - 43）

3 出席委員

| 氏名 | 職名 | 分野 | 備考 |
|--------|--------------------------------|-------------------------|---------|
| 明石 一朗 | 関西外国語大学短期大学部 教授 | 教育学 | |
| 浅野 良一 | 環太平洋大学 教授 | 教育学 | 会長 |
| 池田 佳子 | 関西大学 教授 | 日本語教育、 国際教育 | オンライン出席 |
| 大継 章嘉 | 大阪教育大学 学長補佐 特任教授 | 教育学、 教育行政 | |
| 小田 浩伸 | 大阪大谷大学 教授 | 特別支援教育 | 会長代理 |
| 小酒井 正和 | 玉川大学 教授 | ICT | オンライン出席 |
| 小原 美紀 | 大阪大学大学院 教授 | 労働経済学 | |
| 巽 葉子 | 大阪府公立学校 スクールカウンセラー スーパーバイザー | 臨床心理学、 発達心理学 学校臨床 | |

4 審議会概要

(1) 開会

○会長より、進行について説明。

○ゲスト大阪私立中学校高等学校連合会 草島 葉子氏が講演。

<草島会長>

本日はこのような機会を設けていただきましてありがとうございました。

公立・私学、仲良くいいものを作っていく中では大切な会議だと思います。特にここ最近、我々私学は教育庁の中に入れていただきましたので、こういった形で意見を反映していただけると非常に嬉しく思います。

それでは、資料に基づきまして皆様にご説明してまいります。

まずは 1 ページをご覧ください。私達は、大阪の子どもたち全てに幸せな未来を創る公私調和した仕組み作りを考えています。

私が尊敬する森先生は大阪の師範教育の父、国民教育の父とも言われた方で、「教育とは人生の生き方の種蒔きをすること」だと非常に重い発信をされていました。その教育が安いからとか高いか

らということではなくて、子どもたちがチャレンジする気持ちを持って取り組んでいける環境作りをつくる、これが私達の役割であると考え、教育委員会ともやってきたと自負しています。

2 ページは府内の中学校の卒業生の進学状況です。公立と私学の入学者推計では約 4 割は私立学校に入学しています。これは、授業料の無償化と、橋下知事のときに 7 対 3 という比率はカルテルだと言われたのでオープンマーケットにした結果が 6 対 4 になっています。

3 ページは公私の受け入れ状況です。公私の受け入れ状況は 7 対 3 から 6 対 4 で、特に 2024 年は、公立はほぼ横ばいです。授業料完全無償化が入りましたが、全く、大きな遜色なく公立はしっかりと生徒を獲得できています。

4 ページは、ただ一つ変わったトレンドで私学の専願者の数が増えています。ただ併願の戻り率は極端に減っています。結果、公私の定員のバランス等は 63 対 37 であまり変わっていません。私学専願者のパーセンテージは増えていますが、公立は今年、競争倍率 1.1 倍になるように定員調整をされ、それが人気のある学校で行われました。

資料 3 ページに戻って右上を見ていただくと、令和 6 年度入試では公立高校 70 校が定員割れして、私立学校がなんと 54 校が定員割れしています。公立高校の定員割れは 70 校ですが、実は 1.1 倍の理論で 26 校で定員増されています。生徒数は減っているにも関わらず定員増された結果、人気のある学校で増やしたものの、その学校が 5 校ほど割れてしまったという事実があります。この定員調整も非常に難しいところがあり、授業料無償化が入って 70 校が定員割れをしたと新聞報道でもありましたが、少しニュアンスが違うのではないかなと私達は分析しています。

資料の 6 ページをご覧ください。併願志願者の入学者の割合、いわゆる戻り率は、令和 4 年からの 3 年間を見ますと、令和 6 年に極端に減っています。定員数増により人気のある公立に吸収されるため、私学の戻り率が減ってしまった結果、公立の約 20 人減に対し、私立学校の入学者が約 73 人減っています。だから、問題提示しなければならないのは私立の方だという事実がここで見えてきます。

公立私立の募集人員をご覧ください。府内進学予定者は前年度比 300 人減っていますが、公立高校の募集人員は 398 人増やしています。私学はそれに対して 96 人増やしています。結果、私学が約 73 人減りました。私はここで申し上げたいのは、決して生徒の取り合いをしてはならないということです。この数に踊らされてはいけないと、今日先生方にお伝えしたいと思います。

一方、資料の 8 ページ、通信制高校への進学状況です。ご存知の通り、劇的に増えています。小学校、中学校の状態を見ても学校へ来ることができない子が劇的に増えています。

9 ページの全国ランキングをご覧ください。通信制に通う生徒数を都道府県で並べると、愛知・東京・神奈川・大阪となり、大阪は全国で 4 番目と増えています。これも非常に苦しいところで、大阪のエリア的にも南北でずいぶん差があるように伺っています。

資料 10 ページをご覧ください。今年の入学試験では授業料無償化も入ってきたため、保護者にアンケートをとりました。小学校 2,494 件、中学校 8,505 件、高等学校は 26,194 件、かなり膨大な数からトレンドを見ます。

11 ページには、今回の無償化がどんな影響を及ぼしたかを示します。大体ほとんどの方が既に無償化の対象になっていましたので、収入 800 万円を超える層、住宅ローンがあったり、複数の子どもを育てたり、一番負担がある層で、高校 3 年生・2 年生・1 年生を比べたときに、やはり高校 1 年

生の保護者に非常に大きな影響を与えていることがわかります。きっと感謝されており、少し生活が楽になると思います。

12 ページをご覧ください。学校教育審議会のお話も入ってきましたので、私達が考える現場ニーズとは何かをお伝えします。まず課題の 1 として、入試日程についてのご提案がありました。例えば、2 月の下旬に持ってきたらどうか。なぜ私学は先に実施しているのかというところもあったかと思いますが、これがそのままランディングしないとは聞いていますが、公立が一方的に決めてしまっただけでは、私立が近畿一円全部変わってしまいます。どう変わるのか聞かれたら、私学も入試を同じ幅だけ前にやります。どうしてそうなるのかということですが、私立学校は教育委員会とは違い、我々は生徒の入学数が決まったときに予算を立て始めます。最近ではコンプライアンスが非常に厳しくなりましたので、3 月には理事会、4 月・5 月には補正という形でどんどん学校経営計画を動かしていくわけです。それが入学者数の決定が後ろに来てしまうと出来ないためギリギリ 2 月を待っているわけです。

次のページになります。中学校の現場における問題点について、先日、私達は公立中学校の校長先生方、進路担当の先生方と会議を持ちました。例えば、国立大学の二次試験は今 3 月ですが、それが 2 月に来たらどうなるのでしょうか。入試は、元々公立大学であれば国公立、こちらが中心で、学習の枠組みを組んでいます。この枠組みが前に移動することにより、カリキュラムの変更、行事の変更が生じ、学力を十分に達することができるのかという問題があります。また、例えば、入試が終わってしまった生徒は学校に通ってくるのでしょうか。実は中学入試をしますと、ほとんどの小学生は 3 学期に学校へは行きません。塾の指導も多いと思いますし、風邪をひかせてはいけないという保護者の判断もあると思います。そうすると、2 月に行き先が決まった子どもたちの 3 月の登校意欲は低く、もちろん勉強が好きな子は通ってくるかもしれませんが、遊ぶことに興味湧いてきたその年頃になりますと、中学校の現場がかなり苦しくなります。ここには空白の 1 ヶ月と書いていますが、2 月末に卒業させてしまえばよいという中学校のある先生の見見もありました。だから 3 月をどう乗り切っていくかは課題です。私立の専願で決まった子たちは大丈夫なのかというご意見がありますが、私立では合格と同時に、宿題・課題や登校日を課し、生活指導における約束をします。そして 4 月には服装その他もろもろが学校のルール通りのスタートが切れるような設定がなされています。果たして公立は同じことができるのかが、非常に気になります。資料に赤字で書いていますが、入試日程の変更は先決事項にならないのではないのでしょうか。先ほど申しましたが、実は大阪の私学が頑張っていて入試日を 2 月 10 日で守っています。他府県からはもっと早くにしたらという話もあって、奈良は大阪の 3 日前という日程でやっています。私達も奈良と同じ日程にやらせていただいた方が良いですが、生徒の取り合いになる方を選ばずに生徒の安定した受験を考え、兵庫も大阪もみんなで同一日に入試をしています。こういったトーン認識のあり方は、大阪だけではなく、近畿、私も役員をしている日本私立中高連で、子どもたちの入試日程を極めて子どもたちのメンタルが安定するような形で組み込まれて、長い歴史を持っています。その歴史の長さは私で私学 3 代目ですが、約 100 年近くこの歴史を守ってきているわけです。生徒急増期から、この入試はあって、「15 の春を泣かすな」がそのメッセージです。決して大人の気持ちで入試を動かすのではなくて、中学校の先生と高校の先生がお互いに情報交換して、子どもたちにとってよりよい入試をしようということなのです。

続きまして、課題の3です。第1志望、第2志望を作るとは他府県でもやっており、兵庫でも愛知でも行われていますが、様々な問題があります。例えば、成績の逆転現象は起きないか。あるいは下位の生徒は必ずどこかで受かるのだから、あんまり勉強しなくても、願書に第2志望で定員割れしているところを書けばいいという安易な進路選択、これが一番厳しいところだと思います。実は、授業料無償化になって一番危惧していることは、タダだから何でもいいというものではないと思います。子どもたちには努力をしてチャレンジして自分の人生をつかみ取っていく。その中で国や地方自治体が用意してくれた良い教育を少しでも安く受けさせてあげる、それで彼らの人生が見事に豊かになっていく、そういう姿勢であるべきですが、どうも最近、安直な方向に行き短絡的に楽な学校に行こうとする。失礼ながら、通信制にこれだけ大阪の子が行っていますが、大阪府が認可した通信制は単位修得のセキュリティが非常に強いのですが、大阪以外で認可された通信制の学校は、非常に安易に単位が取れてしまい、安いのです。今までだったら親が止めていましたが、「もういいんじゃないの、それで」となっており、しかも8月に入試があるため、「早くに決まった方がいいね」となる。この間、ある有名な教育者の先生とお話しておりましたら、社会教育として高校教育をどう捉えていくのか。これをまず教育しなければ、タダだから早いから簡単だからということではなかなか難しいのではないかと。子どもたちの未来を力強く作ることはできないのではないかと、そういうことを課題だと考えています。

15ページの資料は、私達は公私のあり方会議で意見は思いっきり言っていますけれども、なかなか実りませんが、検討すべきは教育内容だと私学も公立もお互い思っています。適正な公立高校の配置を検討すべきで、これは3年連続定員割れということではありません。今、柏原市と阪南市には高校がありません。この間知事にお会いした際に知事から「あれはいけませんかね」みたいなお問い合わせがありました。15歳、16歳になったら電車に乗ってバスに乗って行くでしょう、とお考えですが、それは違います。バスや電車に乗るお金がありません。だから自転車に乗って行ける範囲に行きたい学校、例えば国公立に行きたければ国公立、あるいはしんどかったらしんどい、いろんなその受け皿を用意してあげていただかなければいけないと、私はいつも言っています。公立は水道の水のように、どこにでもある一定の教育を受けたいと思ったら受けられる役割。私立の教育はミネラルウォーターで、マグネシウムが欲しいと思ったらマグネシウム。ミネラルが欲しいと思ったらミネラルを少し足してでも自分に必要なものを体に入れるものです。

16ページの資料、1人当たりの教育単価をご覧ください。大阪の1人当たりの教育単価は確かに無償化もあり、私が言うのもおかしいですが、111万円です。兵庫が116万、全国平均132万、東京が129万。要は、公立高校に魅力を与えるためには、1人当たりの投資が大切だということです。投資するには、ダウンサイジング、スクラップアンドビルドで、よりよい学校を作るために、力の掛け方を考えることだと思います。この1人当たりの単価を上げるために、財政の皆様と教育庁の中でしっかり考えていただく、そのことによって子どもたちみんなが高校で頑張ろうという気持ちに変わってくるのではないかと思います。今は、摂津高校だけが人工芝のグラウンドでラグビー・サッカーができます。だから今、トイレを綺麗にしましょうと府議会議員の先生も頑張っていますが、トイレが綺麗でないということは、教育にお金がかかってない証拠です。

最後の提言ですが、教育庁が一本化になり、私達は今までの知事部局から教育庁の中に入りました。当然、公立の高校と私立の高校は対等に話せるテーブルがあると思われませんが、設置されていません。教育総合会議は法の建て付け上、建て付けとは行政用語かと思いますが、私達は入ることがで

きないのです。この学校教育審議会は、基本的に公立の学校のためだけにあるものなので、今日私はゲストスピーカーです。ですが、公私のことや、様々なシステムや様々な子どもたちのこと、不登校のことも含めてですが、大阪の問題を解決しようと思ったら、対等に意見を出し合える教育庁の中の会議がなくてはよくなりません。私は公立学校に潰れてほしいなんて一切思ってません。むしろ良い切磋琢磨をしたいと思っています。

最後、18 ページです。今回私は、残念ながら公立だけを考えた一方的な入試改革が発信されたように、少し報道を見て誤解してしまいました。そんなことはないよ、しっかりもう一度、草島の意見、中学校の村田先生からの現場の熱い意見をちゃんと反映しながら考えていくとおっしゃっていますので、私が申し上げたいのは対立ではなくて調和した関係作り。

これが私達が一番求められていることだと思います。

今日は私 1 人で心細くも敵地に乗り込んできたみたい感覚を最初持っていたのですが、委員の皆様にお会いしますとよく存じ上げている先生方で教育に長けた先生でいらっしゃいますので、今日私が申し上げる気持ちはある程度ご理解いただけたかと思います。

そして、19 ページ、今議論すべきは、公立高校の入試改革なのか、急がれるのは公私の入試結果の検証です。まだ私達は公立高校の入学者の数も教えていただいておりません。子どもたちの成長を止めない、子どもたちを伸ばすために、入れる学校を作って一時的な人気取りをするのはやめましょう。そんなことよりも、学びたい学校に投資していきましょう。

これは 54 校定員割れしている私学にとっても同じです。パーセンテージで言うと、私学の方がたくさん割れています。私学はなぜ閉校しないのか。ダウンサイジングしているからです。ダウンサイジングを学校の大きさを変えろというやり方もありますが、遥かに公立の先生より給与や一時金を下げた形で運営をダウンサイジングしています。この苦労はあまり見えないのですが、このダウンサイジングは、例えば年間一時金 2 ヶ月という学校もあるわけで、それを考えていただきますと、大阪私学の苦労もわかっていただけるのではないかと思います。

今日いろいろ赤裸々なことも申し上げました。ただ、私は公立も頑張ってもらってる。私立もまだまだ頑張れると信じています。一昨日知事にもお会いしました。昨日は私学振興議員連盟とお話させていただきました。公私協のような一方的な会議ではなくて、教育委員会と腹を割って話ができる、お互いに埋め合わせができるような良い会議をぜひ大阪府の中に設定していただきまして、私はいつでもはせ参じますので、どうぞ良い形で教育を進めていただけたらという意見でございます。ご清聴いただきまして皆様ありがとうございました。

○委員とゲストによる質疑応答。

< 浅野会長 >

- ・今お話いただいた内容について質疑応答を受けていただけるので、ご質問のある委員の方は、会場参加の場合は挙手で、オンライン参加の場合は手を挙げるボタンでお示しいたきたい。
- ・それでは、私の方から質問させて頂く。先ほどの中高接続について、私学の場合は、中学校の課程が終わった 3 月にいろいろ宿題を出したり課題を与えたりしていると伺いましたが、私学には中高一貫で内部進学の子と、高校から入学する生徒がおられる。そのあたりに何か違いや工夫はあるか。

<草島会長>

- ・中高6か年の学校と高校3か年の学校があるが、3か年の学校でも合格通知を大体2月12日頃に発送する。それと同時に、課題あるいは宿題、登校日あるいは課題勉強日を、中学校の勉強に邪魔にならないように設定する。中学校の先生に聞くと、私立に合格した子達は持っている課題を、他の子ども達が公立の入試勉強をしている時間にやっていたよ、として、今は3月に安定した時間を過ごしている。
- ・もう一つ私の方からお伝えしたいのは、早く準備をしたいから入試を前倒しにしたいというご意見だったと思うが、それは不登校であったり心の問題であったりいろんなところで情報を先にゲットしたいとの考えだろう。私学はどうしているかという、秋からいろんなやり取りをしている。非常に大きな課題がある子は、私立中高連の中にある人権を考える組織が中学校の先生と直に「こういう子がいるんだけどどうだろう」という相談する窓口をずっと開けている。だから、突然4月になって慌てて準備をすること自体が私立の場合はない。

<浅野会長>

- ・入学者が決まってから、つまり合格した後ではなく入学の意思表示をしてから、今おっしゃったようなアクションをとるのか。基本的には専願者の場合はその時期だが、併願の場合は、その戻りが決まってからか。

<草島会長>

- ・そのとおり。併願の場合、今、2月・3月の23日ぐらいから公立に落ちたという子ども達が泣きながらやって来る。親子で喧嘩しながら、そこからのスタートになる。だけど、その悔しさをバネにしようと、スタートの日になっている。

<浅野会長>

- ・特に配慮の必要な子どもについては秋口から進めているとのことだが、その子がわかればいいが、合格して入学の意思表示をしてから何か配慮が必要だと気づかれた場合はどんな対応になるのか。

<草島会長>

- ・まず手続きの際に必ず課題のある生徒については保護者から相談をする形で受け付けている。その保護者からの情報が入った段階で、保護者の方の許可を得て、中学校から情報を得る。それは別段そんなに急ぐことでもなく併願の場合、中学校も忙しいと思うので、公立入試が終わった後から問い合わせをさせていただく。

<小原委員>

- ・とても興味深く拝聴し、とても勉強になりました。
- ・最後の19ページのところで、入試だけではなくて、大切なのはその後の教育であり、マッチングだと、これはこの会議ですって言ったことであり、入試におけるマッチングだけではなくて、そ

の後に教育が続くかが子どもにとっては大事だと当初から考えている。私学も結局、同じ意見を持っていることが確認でき、非常に大きな勉強になった。

- ・その上で3つ質問がある。1つめは13ページにあった空白の1か月では、生徒指導に不安が残ることは間違いない。一方、同時にこの1か月でできることもあると思う。その1か月に何もしないわけではなく、どこが大事かを考えることかと思うが、新しくできるが増えるのもあるのに、なぜ不安だけをそんなに重く感じるのか。カバーできることがあれば、トレードオフとなる。この生徒指導の不安だけを取り上げ、ここが大事だとおっしゃる理屈があれば教えていただきたい。
- ・2つめはその次のページの第1志望・第2志望について。入試において第1志望だけ書かせていれば落ちることもあるわけで、その落ちたときの不公平感。例えば、1校を選ばないといけないので、本当は上にチャレンジしたかったが、家計のことを考えたら2番目の学校にしよう、そうでない子は1番目にチャレンジできるという不公平感もある。他の不公平感が第1志望だけなら生まれるが、第1第2とすることで皆さんがチャレンジできるという公平感もあると思う。複数志願にすることの、振り分けられた不公平感が、なぜより大事だと考えられるのかを教えてもらいたい。
- ・3つめはやや大きな話となるが、「生徒の取り合いをしてはいけない」の意味を教えていただきたい。安定した受験が大事、それはもうその通りだと思う。が、同時に、最初に言った19ページの受かった後のマッチングを考えると、ある程度競争してある程度の取り合いがあってもよい。その言葉が若干教育にそぐわないと思うが、やはりうちはこういうことができますという公立もアピールをして、そういう提供する側の競争があるからこそ、サービスを受ける側が自分に合ったサービスを選ぼうと一生懸命頑張って探す。受験の安定性の話はわかるが、学校に入った後の教育を受ける学生がすぐにやめてしまわないで、良いマッチングを図って長く勉強できる、つまり教育を受ける時間が長くなり、学生が受ける教育の質が上がり、出口で教育を受けた量、深みが増すのであれば、多少の取り合いというか多少の競争があると、安定した受験ではないけれど、良いものを達成できるという良さもあると思う。それでも、安定した受験の方がやっぱり大事だとおっしゃるところの意図、取り合いしてはいけないという意味を教えていただきたい。

<草島会長>

- ・上手に答えられるかどうかかわからないが、先生のおっしゃるように3月が空白になれば行事を入れられると思う。ところが、公立中学校は、登校しなくても出席日数に関係なく卒業できる。これが高校と違うところで、高校は出席日数が必要だ。今、私立中学校を受験する公立小学校で何が起きているかといえば、小学校に行かない。1月を過ぎたら、入試が始まってしまうから。だから、行かなくても卒業できてしまうことを逆に使ってしまうこともある。ある有名進学校の校長先生に今朝、「先生これはもう本当に怖いことですよ。不登校率が上がりますよ。これは気をつけてください。生徒を縛れないから」と言われた。今も新しい形のコロナが流行っているから危ないし、安易にもう学校に行かなくていい、塾だけ行っておけばという空気になってしまったらどうしようという危惧がある。
- ・それから3月に高校側で何があるかといえば、まだ大学入試が続いている。私学はバタバタと卒業生を見送ると言って卒業させていながらも、受験の指導を続けている。中学校は本当にこの3年生をどうコントロールしていくか。初めて子供たちに合否結果を出すわけで、学力の上中下がわかる。例えば第1志望、第2志望と作ると、例えば公立で北野がトップ、2番目がここ、3番目が、

といった塾のデータからランキングが出ていて、そのランキングが余計に激しくなる。学区がなくなって、公立の学校はランキング化された。そうすると、あの人が上で、私が下だといった空気になっていることも私は実は心配している。空白の1か月は生活指導上問題があるというのは、大きく言うと出席しなくても卒業できる。そこが一番心配だ。出席しなくても卒業できる。だから逆に学級費を残しておいて、3月にいろんな行事を入れていかないと、生徒は来ない。そこで、残ったカリキュラムをやりましょうと言っても、もう成績付けが終わっているのです、子どもたちにとっては関係ない。提出物を出さなくても、テストの点が悪くても関係ないと思ってしまう。昨日、私も多くの中学校の先生方とお目にかかって話したが、「いや僕もう、よう管理しませんわ。難しいですわ。今でさえ難しい」とおっしゃった。ここには学力差がある。やはり勉強する訓練ができている子達は、時間が余ったらその時間により高いレベルの勉強に取り組もうとする。だが、やはり遊びたい盛りだ。コロナで自由時間があつたときによくわかったが、家庭でしっかり面倒を見てくれるのなら別だが、やはり保護者も忙しいので、自由時間ができると、誰が責任を持って子どもの管理をするのか。小学生は学童などいろんなことがあるが、中学生はセルフコントロールが求められる。私も青少年問題の審議会ですべて委員をさせていただいたが、非常に大阪は悩ましい状況にある。それをどうするのかということだ。

- ・ 2つめのご質問の第1志望、第2志望の不公平感について先ほど申したが、確かにチャレンジできるのはいいことだと思う。だが、これをやることに対して私学はどうするかと言えば、併願で公立に進んでもう私学に戻ってこないわけだから、専願入試だけにするとか、私学側も対応を考えなければいけない。入試のあり方自体全部変えることにおそらくなってくる。それが果たして子どもたちにとって良いのか悪いのかはわからない。受けるチャンスがいっぱいあるということだが、今チャレンジしたいからチャレンジしてもらっていい。その併願に私学があって、私学は無償化されているので一定の落としどころを作れているはず。だが、公立だけで考えると、公立の中で一番、二番としたほうがよい。ただ、家庭的にしんどい子、経済的にしんどい子が確かにいる。その子たちはどうするかと言えば、例えば、私立の特待制度などチャレンジすることを私達も準備している。そういう子たちを拾い上げていく。
- ・ もう一つは第1志望、第2志望をどう進めるかを想定してみたが、成績の逆転現象が起こり得ることも想定される。一番問題になったのは入試が終わってからの塾による情報開示だ。例えば特色入試もそうだが、なぜこの子を通してこの子が落ちたのか、なぜこれではいけないのかが、基本的にシステムがきちんと出来上がらないと、また潰れてしまう。せっかくいいものを作っても、その辺は果たして何をどういうふう公平にやるかだ。
- ・ 最後のご質問の生徒の取り合いはいけない。先生がおっしゃりたいことはよくわかる。良い意味でコンペティティブ（競争的）でないといけないと思う。競争力を持っていないといけない。ただし、その競争は入試日程を動かすことがコンペティティブではないだろうと。要は、今、大学でもAO入試とかいろんな形でやって1回受験で3つの学部をチャレンジすることができるなど、どんどん私立入試が前倒しになっている。それでも国公立は3月で待っている。いろんなことをやりすぎて、大学がどんどんしんどくなっている。最後に、何で競争しているかということ、大学の中身。就職率や中のパフォーマンスを、学生たちは見て判断して選んでいる。だから、競争原理が働いていいと思う。ただ、短絡的な取り合いをしてはいけないということが、私が申し上げたいところだ。

< 草島会長 >

- ・最後に一つよろしいか。特色入試は私達も興味があり、どんどん子どもたちの個性を取り上げてやりたい。今、既に公立は英語検定などを使っている。私も英検協会と長くお付き合いしているが、英検自体の方向性もどんどん変わってきて、級を増やしたり料金を高くしたりしているが、生徒は高いけれども受けなければという思いがある。もっと言えば、少子化で検定を受ける人数をもっと増やさなければとの考えがあるから、小学生から受けている。小さいときから資金を投じて英語教育をした子が英検の級をたくさん持っているような状況に今なっている。
- ・最近ある公立高校の先生からこの話があった。英検で何級とったら加点が何点だと話すと、当日の試験の方が難しいから当日の試験を頑張らないでスヤスヤ寝てしまう子がいる。これが良いとか悪いとかではなく、特色入試をするからには平等でないといけないと思う。私達も最後の合否判定にはちゃんと試験を受けてもらいたい。もしもそれが安直に、特色でエントリーすれば生徒会長だからといったことでトントン拍子で話が進むとなれば、私立学校もそのようなものを取り入れる。私達はあまり推薦をやってはいけないと言われているので、やっていない。例えばスポーツでこういう能力があるとエントリーを受けたとしても2月12日、13日にならないと合格を出さず、試験のテストが悪ければ落ちることもある。知事は「特色入試は良いのではないか」とおっしゃっていたが、特色入試も在り方が難しい。測るものがなかなか無い。英検は受験料があれだけ高いので、受けられる家庭の子、受けられない家庭の子に分かれる。そうすると、学力偏差の高い子は、実は経済的にも恵まれている子が非常に多かたりするので、データから見ると、そうすると上の学校には行きやすくなる。英検を受けられない子は評価されないのが、かわいそうと思う。

< 浅野会長 >

- ・今回のお話とはちょっと違うかもしれないが、授業料無償化になって入ってきた生徒は、これまでと雰囲気が違うか、何もそういった変化はないか。学校長としてお話いただきたい。

< 草島会長 >

- ・授業料無償化が始まったのも、もうだいぶ前。大体うちの生徒の7割が無償化の対象。今回3年生から無償化なので、今の1年生はあまり大きく変わっていない。変わったことは、例えば、非課税世帯の子どもたちがチャレンジする。校長として答えるならうちの学校の話だが、その子達は国公立大学にチャレンジしなければ経済的に厳しい。例えば医学部に行きたい子も出てきた。東京大学に行きたいという子も出てきた。そういう子ども達が本当にチャレンジするようになってきたのは、見守っていて嬉しいことだ。大阪はやはり一人親世帯も非常に多いので、その一人親世帯にとっては階層の転換として非常にポジティブにチャレンジする。そういう空気は一定のところでは生まれている。だから、この社会教育をもう1回やって、子供の教育を大切にしようと思う。イギリスでは不登校の子どもを出した家庭が罰せられるというようなルールもあったと聞いているが、そこまではやらなくてもやはり家庭とみんなで子ども達を守っていくというシステムができればいいと思う。

(2) 審議「府立高校改革の具体的な方向性とそれを踏まえた入学者選抜制度改革について」

○事務局より、資料「第 54 回大阪府学校教育審議会資料」に沿って説明。

○説明内容を踏まえた、委員からの意見聴取に先立ち、浅野会長の指示により、事務局より欠席委員の意見を紹介。

<有明委員意見 | 代読>

- ・本日、私学のゲストスピーカーからのご意見をお伺いできないが、事前に資料を拝見して感じたことをお伝えする。入試制度は受験生が同じ条件であることが重要で、公立であれ、私立であれ、それぞれがしっかりと制度の内容、条件を公平に実施していればよいと考える。双方が早めの情報連携を行い、最終形がきちんとアナウンスされることが大切だと思う。
- ・答申案については、まず 40 ページに記載のブランディングについて、民間企業では当然の取組みだと思うが、学校教育の現場でブランディングを取り入れるのはチャレンジングだと感じている。以前に私が述べた「インターナルブランディング」は、教員や一般の方々に理解いただける言葉なのか不安なので、学校外に発信するアウトブランディングに対し、インターナルブランディングは学校内に向けたブランディング活動であると言えるかと補足してもらえるとよいと思う。
- ・例えば、外部への広報活動に注力してアウトブランディングができて、内部の実態が伴わない場合、「言っていることとやっていることが違う」となってしまう、ブランディングが崩壊する。インターナルブランディングができていれば教員一人一人の言動がマーケティングになり、クチコミでその良さが広まるため、アウトブランディングにお金をかける必要がなくなるといったことが期待され、ブランディングを行う上で非常に重要な手法になる。
- ・答申案の 44 ページについて、「学校魅力推進枠」という仮称には違和感がある。中学生が高校の魅力を進めるイメージが生じる。ブランディングの結果として生徒が良さを広めることは事実だが、アドミッションポリシーに合致する生徒を優先的に合格させるのなら「アドミッションポリシー選抜枠」のほうが自然な感じがする。いろいろな言葉を使うのではなく、シンプルな名称をご検討いただきたい。
- ・その他については、異論はない。

<川田委員意見 | 代読>

- ・私学のゲストスピーカーからのご意見について感じたことをお伝えする。課題②は既に中学校長のゲストスピーカーからも指摘されていたところ。同時に高校のゲストスピーカーからは入試から 3 月末までは、入試だけでなく大学入試対応や中学校からの生徒情報引き継ぎもあり教員の負荷が大きく、入試を前倒しにして欲しいとの意見もあった。このバランスで現状の案が提案されたと認識している。
- ・課題③の複数校志願については、同様の入試制度を導入している他県（兵庫県、愛知県）で実績がある制度であり、できるだけ公平に行きたい高校に行けるように考えた結論であると認識している。従って他県では課題③のような問題が顕在化しているのか、またどのように課題を解消しているのか知りたい。

- ・一方、公立はセーフティネットの充実に多くのリソースも割かなければならないという現実もあるので、その点も私学側にご理解いただきたい。理想は公立と私立が協調と競争で高みへ登ればよいと思う。
- ・答申案の 40 ページについては、情報発信に対する各校の予算をある程度確保する必要がある。現状は中学生や保護者はスクールミッション等を十分に理解していないように思える。中学校教員や保護者に向けて平易な言葉や図・表で伝達しなければ読んでもらえず、伝えていないことになってしまう。その点を八尾翠翔高校の校長はよく理解して、分かりやすい資料や動画を作成するなど、熱心に取り組んでいると思った。
- ・アドバンスト・プレイズメントについては、以前の勤務先である大阪工業大学で実績があり、高大セミナー参加で 1 単位として認定されるため、熱意を示すためにも生徒が送ってくれる高校もある。ただ、取り組み自体は良いのだが、大学が主体的に高校を選んで実施することが多く、これに参加できることが高校の特徴となる事はあるだろうが、高校が手を挙げて選んで貰うのは、相手大学次第という側面もあるので、高校の特徴付けとして全ての高校に適用できるものではないように思う。
- ・44 ページの選抜日程については、ゲストスピーカーからは、入試をさらに遅らせて欲しい、入試を早めて教員負担を軽減して欲しい、といった相反する意見が出された。中学校現場での学力の不安については、中 3 の 11 か月をかけて対策できるようにも思うので、高校教員の意見をやや優先した現状でよいのではないかと考える。
- ・答申案は、全体を通して今までの議論を踏まえて丁寧な作成されているので、各高校は「学校魅力推進枠」を最大限に利用してわかりやすい特徴付けを行い、府立高校全体が切磋琢磨して完成度を高めてほしい。

<小酒井委員意見 | 代読>

- ・情報発信について、ブランディングと 3 つのポリシーのどちらが主従かが気になる。3 つのポリシーが先であり、ポリシーを軸にして特色につなげるべきと考える。そこから学校内部でのブランディングをきちんと行い、そこから外向きのブランディングにつなげていくことが大切なので、「必要に応じて」の文言は不要だと考える。
- ・スクールミッションは学校の存在意義そのものであり、どういう学校にしていくのかを考え、3 つのポリシーを決めるべきである。ポリシーを看板だけになっているのが大きな誤りなので、インターナルブランディングが重要と、公立高校や私立高校への講演の際に訴えている。国は公立高校にも特色を出すよう求めているので、スクールミッションを通して教員が共通の価値観を持つ必要がある。
- ・複数志願は、実際に行うとなると仕組みの確立が大変だと思う。期間と労力などを踏まえた検討をしっかりと行うべきだ。
- ・留意事項について、「中学校の教育活動に大きな影響を与える」で終わるのではなく、改革にメリットがあるという視点でもう少しまとめを加えてはどうか。小中高が分断されたまま進めるのではなく、義務教育+高校 3 年の 12 年間の「教育+人材育成」の設計を行い、社会人として育ていくことを想定した制度設計が必要である。

○浅野会長の指名により、出席委員が発言。

【答申案】

<池田委員>

- ・まず、答申案を丁寧にご作成いただいたところに感謝申し上げたい。今までの議論の中で私の方でご提案させていただいた点も、丁寧に拾っていただいて反映されていて、特に日本語指導が必要な生徒たちに対する支援の部分については、文言を増やしていただいたところを確認しており、感謝申し上げます。
- ・この答申案、議論の中でも回を重ねて、配慮が必要な生徒が散在していること、ニーズが多様化していることがいろいろなテーマで出てきている。その対応に、ICTを活用する、オンデマンド型の授業を活用するところもあるが、これを実行するために必要な人や実際に携わる人材の育成の必要性が表現として加わっていてもよい。
- ・大学でもそうだが、時代に合った教育をしていくためのキャパシティビルディングが今、大変ニーズが高まっていて、新たな人材の育成をしていかなければ、変革しようがない。この点がもう少し踏み込んで表現が加わっていると、さらにここから答申が出てきて、何年かこの答申を根拠にして進めていく中で、拠り所になるのではないかと思った。
- ・それから、本日の前半で私立中学校高等学校連合会の方からお話があった。私も附属高校もある私立大学に所属しており、なかなか申し上げにくいところがあったが、特色を出すのは私立であって、公立だとどこの高校に行っても同じような教育を受けられるという表現があったと思う。それと少し相反する点はあると思うが、やはり公立がブランディング、特色を作っていないと、生徒に対する不公平性が増していくと思うので、この答申の中で踏み込んでこの部分を広げて、言及されていることについて、私は高評価をしていると申し添えておきたい。

<明石委員>

- ・公立高校の半数の定員割れは私学の無償化によって私立に人気集中したためではないかという一部報道があったが、今日草島先生のお話を聞き、改めて根本的には少子化における生徒の学びの多様化、あるいは教育への個別ニーズの高まりによって、いろんな課題が生じているという共通した認識ができたかと思い、嬉しく感じる。特に公立・私立の対立構造ではなく、この間審議会でも論議されてきたが、大阪府全体の教育をどう魅力あるものとして活性化して高めていくのかという論議は教育に関わる全ての人たちの共通認識と思う。
- ・その上で今日示された答申案について基本的に全く異論はない。今までのきめ細かな論議が個別に反映された文案になっているかと思う。そこで3点ほど意見として申し上げたいと思う。
- ・1点めは改めて公立高校は、セーフティネットとして、その特色は地域性にあると思う。まずは通いやすく身近にある。また、何とんでも地元の中学校と高校との連携。今までの積み上げもあるし、その延長線上で、今まで府立高校が魅力ある、あるいは特色づくりをめざしてずっと改革をされてきた。それを生かしていくこと。
- ・2点めは、25ページに文科省の新しい時代に応じる資質・能力の育成としてアクティブ・ラーニングで学んだことが、活用してできるようになること。これがキーワードかと思うが、府立高校の特色・魅力づくりの一つのキーワードとして「つながり」というワードが浮かんできた。大学でも、

できることが行動に表れる、そのプロセスに何が一体必要なんだろうと検討している。非常に恐縮な例だが、ご高齢の方が電車に乗ってきたときに私は座っていた。気づき、知り、分かり、席を替わることもできる。しかし恥ずかしながら席を替わることができなかった。こういう話を学生にしたら、「先生あかんで、僕ら替わってあげたよ。友達と一緒に乗っていて、ご高齢の方が乗ってきたから替わってあげる」と彼らは言う。つまり、できることであっても、一人では勇気も元気も湧いてこないときがある。そこに仲間がいたり友達がいたり、他者との関わりの中で勇気も元気も湧いてくる、一人ひとは微力であっても無力ではない。そのつながりこそが、府立高校の一つの強みや特色のキーワードになるかと思う。

- ・もう1点、多様性により、この間「みんな同じ」から「みんな違う」となった。近所にブラジルから来た方がおられるが、「心齋橋を歩いているときに日本人はみんな同じに見えた。」と「いや同じじゃないですよ」というと「いやいや、日本人は同じが好きなんだろう。ブラジルではみんなが違うから落ち着くんだよ。違うから、競い合い支え合い、助け合うんだよ。」とのことであった。つまり日本人というのはどうしてもみんなが同じだと安心するが、多様性と個性化へと価値観を転換するための教育内容の改革もこの答申案の中から読み取れることができると思う。
- ・40ページに記載の、積極的なプロモーション活動は、中学生や保護者、中学校の先生方に高校の姿をアプローチしていく上でとても大事な視点かと思う。大学でも入学前教育が非常に盛んだが、入学してきた学生に聞くと、体験授業とか、在学生との交流、あるいはクラブ体験。入学するまでにそのような個別の経験・体験などをアナログに実際に触れて感じたことが、入学の大きな動機になっている。そういう意味では、各府立高校がプロモーション活動を積極的にしていくためにも、先ほどもご意見が出たが人員や予算面でもバックアップされていくことが必要かなと思う。
- ・最後に、学習に遅れがちなお子様や、心身にハンデのある子や、家庭や地域に課題を抱えている子が笑顔で、16歳の春から高校生活を送れるような改革になることを本当に願っている。そういう改革の素案を今回まとめていただいて感謝。

<大継委員>

- ・おまとめいただきましてありがとうございました。私からは、中間報告の中にはなく、改めて答申案に入れていただいた高大接続の充実について申し上げます。
- ・高校と大学が連携する中で、単位の先取りも進めていってはどうかというご提言をいただいたと思う。私にはそういう経験はないが、例えば昨年から勤めている大学では、元々府立高校の先生方が集まられて、当初32校、現在43校が、府立高校の教職コンソーシアムを作られて、そこで教師をめざす子どもたちを、大学と連携して育成する取組みをしている。この日曜日に開校式をしたが150名の生徒が受講している。これは本学をめざすだけでなく、他の大学をめざすことも当然可能で、教師をめざすというイシューで集まって取り組んでいる。昨年担当し、なかなか優れた取組みであると感じ、今も取組みを進めているところ。そのような高大接続もあると思った次第。
- ・本日ゲストスピーカーからお話をいただいたが、私学のそれぞれの長年の思いがあるように感じており、今日のお話では、一つは教育内容のお話、それから収容定員の問題、もう一つは選抜制度と、この3点にあったのではと思う。

- ・私達がいただいた諮問事項に基づいて検討してきた内容は、府立学校が多様化するニーズに対応する教育内容はいかにあるべきかをきめ細かく審議し、結果としてそのための選抜制度はいかにあるべきかという流れで、答申案の中にきめ細かくお示しいただいたものと思っている。
- ・ゲストスピーカーはお話の中で「15の春を泣かすな」を合言葉にしてきたとおっしゃっておられたが、これは全く公立の世界でも一緒に、中学校でも合言葉としてずっとそのことを守り続けてきており、これは大阪の一つの重要な合言葉ではないかと思っている。この答申案の中でもお示しいただいているが、やはり子どもたちに過度な負担をかけることなく、できる限りスムーズな形で学びの連続性を確保していく入試制度であるとともに、さらには子どもたち一人ひとりが見守られる環境の中で、この後の人生をしっかりと考え、学び続ける意欲を高めていく制度を我々は考えていきたいと思っている。
- ・最後に、以前、本審議会で議論の途中にあった入試時期の問題が新聞などで取り上げられたが、この答申案では非常に柔軟な形で書かれている。前回は申し上げたが、入試の時期の変更など急激な変化は学校現場になかなか馴染まなく、中学校がこれまで行ってきた進路指導のスケジュールもあるので、学校行事全体の見直しをしていかなければならなくなる。こういう課題があるので制度が確定し、公表されて、そして実施に移っていくというプロセスには十分な期間と説明と理解が必要ではないかと思う。答申案では慎重な書き方をさせていただいており、制度実施に当たってもこの留意点を十分踏まえた形で実施をされることが非常に大切だと思った次第である。

< 異委員 >

- ・答申案を改めて読ませていただいて、本当に我々がいろいろ話したことも丁寧に汲みとり、反映していただき、これからの制度設計の方がずいぶん大変だろうと思う一方で、ありがたい思いである。
- ・今日最初にご講演いただいた中で、小原先生もご質問いただいたように、私もこの空白の一ヶ月という課題についていろいろ思うところがある。中学校は変化に合わせていくために、カリキュラムであったり、先ほど大継先生がおっしゃったようないろいろな工夫が必要だろうと思う。ただ、子どもたちが果たして学校に本当に来なくなるのだろうかという点は疑問。学校側の苦労はあるが、中学入試と高校入試では随分子どもたちの年齢も違うので、学校がきっちりカリキュラムを組んでいけば、子どもたちはこういう言い方をすると語弊があるかもしれませんが、勉強だけをしに来ているわけではなく、友だちとの最後の時間であったり交流であったり思い出を作ったり、いろんな時間を作ることができるのではないのかなと感じた。学校側は大変だが、時間をゆっくりかけて準備をしていただければ、きっと痛みを伴いつつも、よいカリキュラムを作ってくださいと期待している。
- ・答申案を改めて読ませていただき、すごく素敵な言葉があちこちにあると思った。一つめが38ページ3章に書いていただいている「社会との関わりの中で、生徒自身が自己のあり方や生き方を考えるとともに」という言葉。これは我々発達心理学とか臨床心理学を専門とする人にとって、まさにこの青年期の発達課題にぴったりとあてはまる言葉で、この文脈で入れるか、とても素敵な言葉なのでもっと前に出していたかどうかを検討いただきたい。青年期は13歳ぐらいからスタートして大学を出るぐらいまでの長い期間で、高校は真ん中ぐらいの3年間にあたる時期。その時期にいわゆるアイデンティティを確立していくという大きな課題の中で、この言葉に含まれている意味が

とても大きい。いろいろな勉強や特色であれ、地域に根ざしているものであれ、その中で自分のあり方を見つけていくためのもの、あるいは共にあるものとして、とても大切な言葉も入れていただいたし、とても大事な指針であると感じた。

- ・次に 40 ページのブランディングのお話で、最後に卒業後の出口をしっかりと示すことと書いていただいているが、この出口という言葉は私も前回使ったが、一つの出口というよりは、多様化という言葉に表されるように個々人の個性を生かした出口といった修飾語を入れていただくと、よりその出口が何か仕上がった出口とか、一定の学力、進路とか、そういう決まったものをめざした出口ではなくて、それぞれの個性が尊重されている、それぞれの個性が生かされた出口がしっかりと表現していただける文書にさせていただくと、より良いかと思った。
- ・4 章 44 ページの学校魅力推進枠についてはいろいろなご意見があり、他に何があるのかと言われると困るが、先ほど有明委員のおっしゃった「子どもたちが学校の魅力を伸ばすというわけではないだろう」という意見に、「なるほど、私もそこに少し違和感があったのだな」と思った。
- ・次に 43 ページの選抜制度改革の背景にある、「加えて～」のパラグラフがとても重要な視点を書いている。「解決策として中学校・高等学校間における十分な情報共有や、高校段階での再アセスメントが重要となる」は何度も論議に出てきたところだが、具体的には難しいので、教育内容とか実践とこのポリシーをどう一致させていくのかは悩みどころだと思う。府立高校は府立であり、中学校は〇〇市立であることが多く、また私学は学校法人が設立母体であることが多いと思うが、子どもたちについての情報を個人情報という縛りを持ったまま、いつどれだけ中学から高校に連携させていくのか。非常に大事だとわかるが、SC（スクールカウンセラー）をしていても、とても気になる子どもたちをいざ、府立高校、私学に送り出すときの情報共有の難しさを、スクールロイヤーの先生方に教えていただくことが多い。実際には、中高連携の中で、スクールロイヤーの法的な助言、それから SSW（スクールソーシャルワーカー）としてどういうご意見を持たれるのか、要対協に上がっているような個人情報の枠を外せるお子さんでない場合、どうしていくのかというような具体的ところをしっかりと検討していただくと、SC 側としても本当に安心だと思う。では、送り出す中学側からどういう子どもたちが気になるのかということ、SC としてはやはり不登校経験者。加えて、潜在的に不登校になる可能性が高い群は、中学校の先生がわかってらっしゃることも多い。この子が高校に行ってやっていけるのかという思いを持っている先生方も結構いらっしゃる。まず、不登校の実際の経験者や潜在群をどういうふうに伝えていくのか。二番めの群として、発達特性や情緒に配慮の必要なお子さん方の情報をどう伝えていくのか。三番めの群としては、これも臨床心理士として思うことだが、今、自死をする子どもたちが大変増えているという非常に痛ましい事態を受け、希死念慮の高い子どもたちや実際に中学時点で自殺企図を企てたことのある子どもたちの情報をどのように伝えられるのか。命に関わる事案は 1 学期の早々に起こってしまうことも大変多いし、不登校に関して言えばゴールデンウィーク明けぐらいから来られない子どもたちも大変多い。自死については 2 学期の始業式前が統計的に多く、古くから言われていることなので、割と高校に入って前半の時期にハイリスクであると考え、情報をしっかりと伝達することが遅くなってしまっただけとはいけない。その視点と個人情報保護法のことも含めて、スクールロイヤーや SSW、臨床心理士の意見も聞いていただきながら、仕組み作りをしていただくことが必要と感じている。
- ・45 ページに「潜在的に支援が必要な生徒に対しても十分アセスメント」とあり、このアセスメントという言葉も入れていただいたことを嬉しく思っているが、アセスメントを入れるならアセスメ

ントとプランというところまで入れていただければいいと思った。実際にアセスメントを行ったものの、高校現場の教科教育とか教育相談にどんなふうに結びつけるのかまでが一連の流れと思うので、アセスメントをしてプランをするまでセットで考えていく必要がある。

- ・最後に 46 ページに留意事項を書き添えていただいているが、最初の 1 行目の選抜制度の変更にあたって教育内容をどのように充実するかをセットで考えていく。これは前回に事務局から改めてリマインドしていただいたように、また私学も結局ここは同じ考えであることを今日我々は確認できたので、留意事項というより前提であると感じた。

<小原委員>

- ・答申案の全体のまとめ方や構成内容に全く異議はない。とても丁寧に書いていただいたという印象を持っている。
- ・40 ページの卒業の出口、先ほどのご意見は本当にその通りだと思う。これ 1 文で「また～」のところが 1 行で終わるが、おそらく今までも就職率とか大学進学率は出していて、そういうことではなくて多分内容が必要だと思う。出口として、こういうところに就職、こういうところに入学、進学率ではなくて、自分に合うところであったり自分が先を選ぶことであったりが達成できたということ発信してほしい。なので、「出口をしっかりと示す」だと少し不十分だと思う。
- ・2 つめは、何度も上がっている 40 ページ（2）での積極的なプロモーション活動には、予算確保が絶対に必要なだろう。民間でのブランディングと少し違うのは、間違いなく放っておいたら、利益が見えにくいため動かない。必要なものに対して補助を出すのは絶対に必要なもので、予算について経費が必要だと書かれてもいいと思った。
- ・41 ページの高大接続は、先ほど、高校側がなかなか手を挙げて大学とマッチングさせてもらいにくいとの話があったが、これは実は大学側も一緒であると思っていて、声がかかれば、「分かりました、行きます」となっているが、なぜこの協議がされてこの高校に行くのかわからないまま行かされてるようなところもある。その繋ぎこそ、府でできないか。放っておくと、特定の公立高校だけに大学教員が流れていく。全体としてのアレンジが必要で、おそらく学校でもある程度来てほしい大学があり、大学もターゲットとしている高校があると思うので、それは府こそが見えるのかと思うので、第三者が繋ぐ方がいい。府としてできることがあると書いてもいいと思った。
- ・44 ページの名称について、学校魅力推進枠は学校目線である。子どもからしてみたら自分の魅力を発揮してくれる枠である。なので、学校の魅力を推進という意味で書いたのではないかもしれないが、学校と付いていると、子どもの魅力が推進されるわけではなく、学校の魅力が推進されるようになってしまう。魅力推進は悪くないように思うが、それが学校からという形で書かれるとちょっと違和感が出ると思った。大変申し訳ないが、それに対して何か案をとると、おそらく誰も言えない状態とは思ふ。曖昧な言い方で申し訳ない。
- ・45 ページに 3-2 の途中、先ほどの草島先生からの話もあり、なるほどと思ったが、合格が決まった生徒が空白期間を持つ。本当に積極的に動ける子どもにとったら、準備ができる期間でもあるので、やはり使い次第と思う。ここに書かれてる準備だと学校の十分な準備期間と書かれているが、子どもも十分に準備期間が与えられるとして、子どもが準備期間を取れるという一言があってもいいと思った。

- ・3-3で、当たり前なのかもしれないが、今日の前半にあったように、安定した受験を失わないように注意しながらなど、安定した受験はやはり大事な側面だとわかっていてこういうことを言っていると伝わる一言が入っていただければいいと思う。

<小田委員>

- ・丁寧に答申案をまとめていただき、本当にありがとうございました。
- ・特に私の方からは45ページの先ほどから皆さんおっしゃっていただいていることだと思うが、入学予定者に対して配慮を要する、または潜在的に支援が必要な生徒に対する丁寧なアセスメントをしていくため、中学校との連携を図り高校生活支援カードを活用していくことになると思うが、不適應をできるだけ事前に止めると先生方も理解して対応していくことが、今の多様なニーズのある生徒たちが入っている高等学校の状況からすると重要なこと。答申案に入れていただいたことで、今後の高等学校のあり方に大きく影響してくるので、本当によかったと思っている。
- ・2点だけ確認させていただきたい。45ページの3-4「これらの制度改革によらない選抜」として、日本語指導が必要な生徒選抜や知的障がい自立支援コース選抜や共生推進教室選抜がここに書いていると思うが、同じ選抜として支援学校はここに入らないのか。支援学校という枠組みで捉えるのか。選抜という意味では、高等支援学校も選抜なので、並列にならないのか。そこをご検討いただければと思っている。ぱっと見た瞬間にそれが入っていないのが、選抜があるというシステムの中で少し違和感があると感じていた。これには意図があるのならよいが、一度ご検討いただけたらと思う。
- ・もう一つ、これは先ほどあったが、3-5の制度導入にあたっての留意事項で、「入学者選抜制度の変更にあたっては、教育内容をどのように充実するかがセットでの改革が不可欠である」は、私も非常に大事なことだと思っているが、ただここでいきなり「教育内容を」とある。これはずっと論議してきた者には何となくわかるが、この教育内容がどういうことを指すのか、初めて見た人はどこまでの教育内容を言っているのかがわかりにくい部分があるので、何か例示を入れてわかりやすくなれないか。○○○といったなどの教育内容の例示を入れることができないかご検討いただけたらと思う。

<浅野会長>

- ・今、皆さんからいろいろご意見をいただいた。皆さんのこれまでのご意見をうまくまとめた上でよくできた答申案になっていると思っている。
- ・そこで何点か聞いて気になった意見を申し上げますと、学校魅力推進枠という言葉には少し抵抗がある。しかし、スクールミッション枠というの、基本的に同じような意味になるので、言葉でいいものはないが、工夫のしどころである。ただ考えるに、今回こういった入試制度が出てきているが、元々「こういった学校にしたい、こういった子どもたちを育てたい」という理念があって、そしてその内容があって、その方法としての入試制度が出てくるわけである。なので、何回も繰り返し出ているように、教育の中身の魅力化を我々は推進していく必要がある。おそらく、それをコンパクトに表現するのが、スクールミッションである。スクールミッションは、文科省が伝えて何かわかったような気になっているが、いろんな県の説明を見ると、我が校の存在意義の再定義である。本来、経営学では使命が組織を作るといって必ずミッションがあって組織がある。それが時代とと

もに変わってきたので、今一度考え直して、我が校の使命を変えろと言っている。ドラッカーなどが言っているのは、使命の考え先は大きく3つである。1つはやはり個人、学校に通ってくる子どもたちである。2つめはコミュニティで、地域、あるいは親しい人たちの間柄みたいなものである。3つめは社会である。そういったことからすると、出口というのは、スクールミッションに非常に関わっている文言ではないかと思う。本校は、地域のこういったことをめざす、そういった学校を作るんだという学校もあれば、本校は世界の平和に直接貢献するような高校をめざすんだということもあっていい。いろいろミッションの定義があると思う。多分、ここは私学も一緒に、私学はこれが建学の精神である。今こそ公立らしい建学の精神とは言わないが、スクールミッションを作って、それに共鳴して、こういうふうになりたいと考える生徒たちが来て、そして良い学校を作っていく。堂々巡りになるが、今回の取り組みは単なる入試制度の改善ではなく、大阪の教育を良くしていく。特に高等学校をよくしていく、中学校との繋がりを良くしていく、そういったことも非常に重要な答申ではないかと感じた。

○浅野会長より、今回の意見を踏まえ、継続審議できるよう事務局での準備を指示。

(3) 閉会

- 事務局より、次回開催は8月16日(金)となる旨、連絡。
- 閉会